

イスラーム礼拝施設実見録

ウズベキスタン・オアシス都市での祈り方 「バハウッディン」と「ヒズル・モスク」にて

村山和之 共同研究員／本学非常勤講師

1——調査の視点

2005年、ウズベキスタン調査に赴くにあたって筆者は、自らが調査経験を有する南アジア世界のイスラーム礼拝施設とウズベキスタンのそれとを比較し、中央アジア的イスラームの要素を抽出してみようと考えた。マスジッド（モスク）や聖者廟といった礼拝施設は、礼拝方向の指示や埋葬法の点で、一定のイスラーム建築文法に則してさえいれば、伝統的にイスラーム世界各地で自由さが許容されている。したがって、中央アジアの人びとの需要と趣向に深く結びついた形態で建立され、営まれてきたこれらの施設は、「中央アジア的イスラーム」の結晶であるといえよう。それらは、ソ連が作り出した無宗教時代も途切れることなく、イスラームを守り続けたウズベキスタンの人びとの、自らの信仰に対する強い思いの象徴として機能してきたはずである。また、ウズベキスタン共和国が独立した後、再び自由になったイスラーム伝統の新たな生成が試みられる求心力をもった現場でもある。つまり、原理主義への回帰や新たなイスラーム・フォークロアの興隆などに代表される宗教運動の拠点となっていることが経験的におしはかれるのだ。わずか1回の訪問で、その目的が達せられるとは思えぬが、少なくとも今後継続的に訪問を重ね調査してみたい興味を満たしてくれる研究対象にめぐりあいたかった。

実際に現地を踏んでみたところ、訪問地のサマルカンドやブハラにおいてイスラーム礼拝施設は想像以上に機能していたことが分かった。信仰の場所として、あるいは観光名所としても人びとはモスク、王族や聖者の廟を訪れているのだ。南アジアの現場と比較しても、全く同じ行為が営まれている。そこで、今回は訪問者の礼拝・願掛けの仕方と施設に注目し、南アジアからの視点を意識しながら整理してみることとする。

2——南アジアへのイスラーム街道

マー・ワラー・アンナフル Ma wara'al-Nahr、アラブ人が云うところの「川（ア

ム・ダリヤ)のかなたの地」にあたる現在のウズベキスタン。南アジア文化史の領域においても、イスラーム勃興以降の歴史のページは中央アジアからの寄与無くしては綴れない。

8世紀、アラブの若將軍ムハンマド・ビン・カーシムによるインダス川下流域「スィンド地方」の一時征服が、南アジアにおけるイスラーム上陸の第一歩ではあったが、ペルシアを東西に横切り、西方からその道を通してイスラームが再びやってくることはなかった。イスラームはその後、現在のアフガニスタンやウズベキスタンの道から、略奪や征服統治や布教などの形をとって南アジアへと進出していった。テュルク系諸民族やパシュトゥーン人の騎馬隊がインド平原を疾走し、その結果としてペルシア語、チャガタイ・トルコ語、パシュトー語等の響きがインド諸語の容器に混ざって新しい言語ウルドゥーが誕生した。宗教自体も中央アジアのままではいられなかった。唯一絶対神の教え「イスラーム」も大きく南アジア化(ヒンドゥーをはじめとする在地宗教との混交)してゆく。このような社会・文化的变化が、ガズナ朝の侵入からムガル朝の成立までほぼ500年もの間続いたのである。

インド世界におけるイスラーム化は、アラブ人が直接占領したごくわずかな地域を除いて、中央アジアからのトルコ系諸民族が果たした役割が大きい。少数の占領軍で大多数のインド人を支配するために、彼らはバグダードのカリフに朝貢してイスラームの權威を後ろ盾とする一方、在地のヒンドゥー諸侯たちを宥和しなければならなかった。人頭税と土地税を徴収する対価として、本来はユダヤ教徒とキリスト教徒だけに与えられてきた非ムスリムに対する生命・財産の安全の自由「ジンマ dhimma」を、占領下のインド人たちに与えた事は「イスラームのインド化」といってもよからう。

インドのイスラーム化は、モンゴル軍襲来を機に、中央アジアや西アジアから多くの宗教指導者たちが逃避先として、また布教先としてインドを目指したことでより拍車がかかった。なかでも、神秘主義教団に属するスーフィーと呼ばれる伝道師として求道者たちは、古来より盛んであった聖者崇拜の下地に馴染みつつ、インドの地に深く浸透していった。カーディリー教団、チシュティー教団、スワラルディー教団、そしてブハラに本拠を構えるナクシュバンディー教団がインドの地で勢力拡大に鎬をけずった。スーフィーたちは、所属する教団はさまざまではあったが、修行や禁欲の実践をとおして、積極的に神との合一体験を求める根本原理は共通している。

教団の高名なる導師たちが没すると、死後もその祝福を求める弟子たちや施政者によって墓廟が建てられ、そのまま一般民衆も訪れる願掛けの場所、現世利益を祈願する聖地となっていく。スーフィズムと聖者信仰が絶妙に組み合わさった、このような聖者廟を南アジアではダルガー dargah、ズィアーラト ziaratと呼んでいる。

ダルガーはもちろんイスラーム教の礼拝施設ではあるが、祈りを捧げる直接の対象が、祀られている聖者であってアッラーではないことが特徴的である。神から特別な神秘的能力を与えられたと信じられる聖者（ワリー wali、ピール pir）を仲介者として、その恩恵に与ろうという仕組みである。聖棺に対峙して祈る言葉は、『クルアーン』（『コーラン』）のアラビア語であってはいけない。自分の母語で、御利益（子宝祈願、商売繁盛、合格祈願、交通・旅行安全等）を祈願するのである。マスジッド（モスク）は、アラビア語で決められた祈りを捧げる、イスラーム教徒のための純礼拝場所である。それに対してダルガーは、宗教を問わず、老若男女を問わず、祈りの内容を問わない、庶民のための純祈願場所なのである。南アジアでは、イスラーム教徒のみならずヒンドゥー教徒たちも日常的に祈願に訪れる場所となっている。

さて、そろそろイスラーム街道を北上して、中央アジアへ戻り、現在のイスラーム礼拝施設を見直してみたい。

3——ウズベキスタンの礼拝施設をたずねて

今回の調査旅行では、タシュケント、サマルカンド、ブハラの三都市をめぐる。まずは、この行程の中で筆者が興味の対象としたイスラーム礼拝施設を列挙し、コメントしてみたい。施設のウズベク語あるいはタジク語による表記はそれぞれ、「モスク」（マスジディ masjidi）、「メドレセ（神学校）」（マドラサシ madrasasi）、「墓」（グル gur、マクバラシ maqbarasi）である。

1. タシュケント

a. クカルダシュ・メドレセ

オールド・バザールと呼ばれるチョルスー・バザールに隣接する場所に、シャイバーニー朝の大臣クカルダシュによって16世紀に建てられた神学校（メドレセ）。ソ連時代は倉庫として使用されていたが、独立後修復され現在は神学校として再び活動している。神学校なので当然モスク（マスジディ）の機能も果たしている。平日は、ここで学ぶ神学生と観光客しか訪れない静かな施設だが、金曜の集団礼拝日は大勢の信徒であふれる。



図1 グリ・アミール内部の棺

2. サマルカンド

a. グリ・アミール廟

ティムール帝国の皇帝ティムールと彼の息子たちが眠る霊廟。グリ・アミ

ールとは、タジク語で「支配者の墓 gur-i-amir」を意味する。1403年にオスマン帝国遠征で戦死したティムールの孫が建てたメドレセがあった場所に、彼の死を偲んでティムールが廟を建て、1404年に完成させた。1405年にはティムール自身が亡くなり、この廟に葬られている。1996年に内部の修復が完了している。廟の内部は美しい装飾が施されている。聖地というよりも文化遺産としての要素が強い。その証拠に売店の土産物は充実しているが、墓に捧げる花・香・蠟燭といった供物は売られていなかった(図1)。

b. ルハバッド廟

グリ・アミール廟の北側に建つ14世紀後半の霊廟(マクバラシィ)。神秘主義者シェイヒ・ブルハヌッディン・サガルジを祀った聖地である。「霊の ruh おわすところ abad」を意味し、預言者ムハンマドの遺髪を納めた箱と一緒に葬られたという伝説から、民間信仰の人気スポットとなったという。内部には現在、2つの大棺が納められており、棺の周りには花束と花が一輪ずつ供えられていた(図2)。同境内にはあやかり墓と見られる墓が多数見られた。ここでは、比較的女性の参拝者が多かった。

c. ビビハニム・モスク

1399年から1404年にかけて、ティムール自ら「世界に比する物なき壮大なモスク」を目指して異例の速さで完成させた大モスク(マスジディ)。完成の後1年してティムールは急死し、設計ミスと急ぎすぎた建設プランが原因で、礼拝者の上に煉瓦が落下する事故が続き、礼拝者がいなくなってしまったという。広大な敷地に巨大なモスクが廃墟として残っており、宗教的には用いられていないようである。なお、隣接するレギスタン広場(世界遺産)にあるメドレセは、「サマルカンド音楽祭」の会場となっており、ゆっくり見学できなかった。さらに「シャーヒズィンダ廟群」と呼ばれるサマルカンド随一の霊廟コンプレックスには、本調査目的に合致していながら時間の都合があわず訪問を断念している。

d. ハズラティ・ヒズル・モスク

最も興味をひかれたこのモスクについては、項を新たにして若干の考察を行なうこととする。

3. ブハラ

a. ミル・アラブ・メドレセ

1536年にウバイドゥッラー・ハーンの資金で建てられた神学校。この町のシンボルともいえるカラーン・ミナレット(大塔)とカラーン・モスクに面して位置し、ソ連時代に中央アジアで開校を認められていた唯一のイスラーム学校である(図3)。

b. バラハウズ・モスク

1718年にブハラの王城(アルク)とレギスタン広場を挟んで建てられたハーン(王)専用のモスクである。モスクの前にハウズと呼ばれる池がある(図4)。

c. チャシュマ・アイユブ

「ヨブの泉」を意味する泉を中心とした聖地である。チャシュマとはペルシア語で「泉・目」を意味する。人びとが水不足に困っていた時、ヨブが杖で叩くと水が湧き出たという伝説を持つ。12世紀からこの泉は眼病に利く霊泉として、遠くからご利益を求める人びとが集まったが、疫病の流行で禁止されたという。現在もドームに囲まれた中で水は湧き出ている。

d. チャルバクル

ブハラの西7キロほどの綿花畑に囲まれたスミタン村にあるネクロポリス（霊廟街）。チャルバクルは「4（人）char のバクル bakr」を意味し、預言者ムハンマドの同族で初代カリフであるアブー・バクルと、その3人の兄弟がここに葬られたという伝承から信仰を集めた。有力者の墓地が並び、16世紀からはモスク、メドレセ、巡礼宿も併設されて、それらを寄贈したハーンの一族もここに葬られた。現在はきれいに整備されているが、特別に墓参の形跡は認められなかった。

e. バハウッディン

ブハラからおよそ3.2キロ、カスリ・アリファーン村 Kasri Orifon にある14世紀の聖者バハウッディン・ナクシュバンド Bahauddin Naqshband (1318-89) を祀った聖廟コンプレックス。ここは彼の聖誕地であり昇天地でもある。バハウッディンは、中央アジアからインド世界、東南アジアにおいても大きな影響力をもつ神秘主義教団ナクシュバンディー教団 Tariqa-i-Naqshbandiyya の開祖である。もともとフワージャガン Khwajagan と呼ばれていた教団がバハウッディン以降ナクシュバンディーと呼ばれるようになった。バハウッディンの生家が伝統的刺繍業を営んでいたことから、ナクシュ（刺繍の柄）をバンド（結ぶ）する者「ナクシュバンド」と称したからだ。ひたすら柄を縫い取る行為が、ひたすら神を念じる唱名行為と象徴的に重ねられている。



図2 棺に供えられた花



図3 メドレセの入り口



図4 モスク正面、手前がハウス



図5 バハウッディンの棺



図6 礼拝に集まったウズベク紳士たち



図7 願掛けの古聖木

ここは、大変大きな礼拝施設の集合体で、モスク、バハウッディンの棺(図5)、ハウズ(池)、修道場(ハナカ)、巡礼宿、博物館、そして、ティムール朝やシャイバーニー朝などこの地を治めた施政者たちの墓廟などがある。

モスクには男性用と女性用の両方がある。聖棺には供物は捧げられず、静かな祈りや願掛けが巡礼者たちによってなされていた。礼拝にはイマーム(礼拝指導者)が巡礼者たちを親切にガイドしている。彼は尊敬を集めており、モスクに集うウズベク人たちの写真撮影許可を本人たちに求めたところ「イマームに伺ってくれ」と言われた(図6)。ハウズの傍に茂る桑の樹下には、桑の古木がよこたわって置かれてあり、そこは願掛け場所として機能している。家族連れ、特に女性たちに人気があり、木の下をくぐり、背中を搔くようにこすりつける。また、古木のみならず桑の木の枝や葉にも布片や色糸を結び、紙幣や貨幣をお賽銭として捧げて願をかけていた(図7)。

バハウッディン廟は、本調査で最も神秘主義と民間信仰の交差する礼拝施設の1つではあった。ただ、参道の両側に奉献用の布や食物、花などを売る店がひしめき合っているインドやパキスタンの聖者廟とは明らかに違っている。

奉献用の小道具は入り口の清潔な売店で売られている蠟燭だけである。願掛け用の糸は明らかに持参した物だ。また、巡礼記念に買い求める記念品も特には見当たらなかった。ウズベク語で書かれたガイドブックは売られていたが、聖者のイメージ画や縁起を語ったオーディオ、土地の名産品などは見つけられなかった。

入手したパンフレット⁽¹⁾には、ここはソ連時代は廢墟も同然であったと記され

(1) MEMORIAL COMPLEX OF HAZRAT BAKHOUDIN NAKSHBAND, 2004.

ていた。独立後カリモフ大統領がバハウッディン生誕675年式典を主催したことを機に、整備がすすみ、はれて2003年に現在の形となった。このことから、この聖地は、新しく開かれた施設であると考えらるべきであろう。

南アジアに比べてこのウズベキスタンでは、一概にイスラーム礼拝施設にやってくる礼拝者・訪問者の宗教的熱狂性というものは観察できなかった。もちろん、宗教的祝祭日や記念日にあたれば別の側面も見られる事は予想できる。しかし、観光者は論外としても、霊廟などで感極まって落涙したり、体が痙攣したりする様子もなく、淡々とお祈りしている姿が印象的であった。ことに、ナクシュバンディー教団は、世俗から離れ突出したスーフィー修行を禁じているので、バハウッディン境内でも誰もが静かに心中で神の名を唱えていたのかも知れない。霊廟の建造物を手で触れたり、接吻したりする行為は共通点としても観察することができた。

一方、すべてではないがモスクや霊廟の境内に靴を着用したままで立ち入ることができる点には驚いた。イスラームは元来清潔を良しとする宗教である。その上で、聖性が高くなればなるほど、浄性も比例して高くなり、穢れたものを聖域に持ち込むことを嫌悪する傾向が南アジアでは強い。これは、穢れを極度に恐れ嫌うバラモン教文化の上にインド化したイスラームの特色なのか、と逆に中央アジアから問題を突きつけられた形となった。

4——サマルカンドのハズラティ・ヒズル・モスクに関する所見

本調査をとおして筆者の好奇心を最も刺激され、今後も継続的に訪れてみたいと感じた礼拝施設が、本項で紹介するサマルカンドのハズラティ・ヒズル・モスク Hazrati Khizr Masjidi であった。ガイドブック²⁾にはタイトルも含めてわずか5行で、「アフラシャブの丘の南端に建つ19世紀のモスク。アラブの侵略時、ゾロアスター寺院後に最初のモスクが建てられたのがこの場所だといわれている。美しく彩色された木造のテラスは、バザールと町の様子を見渡すことができる格好の場所」とだけ記されてある(図8)。

ソグド人の栄光、サマルカンド旧都址であるアフラシャブの丘に



図8 ハズラティ・ヒズル・モスク

(2)『地球の歩き方——シルクロードと中央アジアの国々'05〜'06』ダイヤモンド社、61頁。

このモスクは位置している。この立地からも、ゾロアスター寺院跡に建てられたということからも、明らかに古くから宗教施設を呼び込む何らかの聖地性を有していたことが推測される。しかもこのモスクの名称に、「ヒズル」の名が冠せられていることがキーポイントとなった。ヒズル Khizr は『クルアーン』中にも登場する伝説のイスラーム聖者で、語義は「緑」を指し、「不死性」と「水」を司る神秘的機能をもつ。イスラームの伝播と共に、イスラーム世界に広がり、各地でさまざまな伝承の中に生き続けている聖者なのである⁽³⁾。筆者はこの聖者を南アジアで調査中であることから、大いに興味をそそられたのである⁽⁴⁾。

今回は訪ねられなかったが、このモスクのすぐ東方に位置するシャーヒズィンダ霊廟群 Shahizinda との関係性にも興味をそそられる。「生きている王」を意味するシャーヒズィンダ shah-i-zinda の名は、死してなお生き続ける不死性と、ガイバ ghayba と呼ばれる「隠れ救世主」の要素を兼ね備えた伝説に由来しているからだ。このモスクが建てられた時期と同時代のアラブ侵略時代、布教の為に来訪し殉死した預言者ムハンマドの従兄クサム・イブン・アッパースがシャーヒズィンダと呼ばれている。彼は礼拝中に異教徒に首を刎ねられたが、そのまま礼拝を終え、自分の首を抱えて深い井戸へ入っていった。そこで、永遠の命を得て、イスラームに危機が訪れたとき、救世主として現れる、と伝えられている。

本項ではまず、このモスクの縁起をモスク内に掲げられた英文の掲示文から簡単に紹介し、その次にこのモスクのイマームが語ったモスクとヒズルとの関係を記して報告としたい。

1. 縁起

伝説によれば、ウマイヤ朝のホラーサーン総督で中央アジア征服者であるクタイバ・イブン・ムスリム (669-715) と聖者ムハンマド・イブン・ヴァーセ (Muhammad ibn Vase) の二人が、モスクを建立するために最も適した土地を探していた。二人は背が高く白い外衣をまとった老人ハズラット・ヒズルと出会い、伝統に則って挨拶を交した。ヒズルは彼らの望みをきき、モスクを建立するために、この地域で最も高くかつ平坦な土地へと導いた。クタイバはその地点にモスクを築くことにし、急いで工事が始まった。基礎工事が終わった頃、ヒズルが現れメッカの方向を示すミヒラブの位置の誤りを指摘した。誤りの方向に祈ることで降りかかる不幸を取り除いてくれたヒズルをクタイバは賞讃し、このモスクをヒズルに捧げた（もし注意深く見るならば、メッカの方向にヒズルによって正しく直された煉瓦が、今もあるということがわかるでしょうとも記されている）。

(3) 家島彦一「インド洋と地中海を結ぶ海の守護聖者ヒズル」『海城から見た歴史——インド洋と地中海を結ぶ交流史』名古屋大学出版、2006年、625—665頁。

(4) 村山和之「不死なる緑衣を纏う聖者の伝承と現在——ヒドルとヒズルの世界」永澤峻編『死と来世の神話学』言叢社、2007年2月刊行予定。

民間伝承の中では、ヒズルは預言者であり、聖者としてもあらわれる。アラビア語から訳すとヒズルは「緑色の光、生き長らえる者」を意味し、神秘的な姿をとり永遠の命をもつ象徴的な役割を演ずる。私たちは皆、生涯の中で2～3回はヒズルと出会うものであるといわれている。出会いやすい場所は、泉の近くであったり、海や庭園のそば、葉のついた小枝の脇だったりする。婦人や少女は夢の中でヒズルと会い、祝福を受ける。ヒズルと会った者は率先して孤児や貧者を救済し、気前のよさと良い行ないによって名声を獲得する。

このモスクの敷地内には2002年に偶然発見された古井戸アルズィスがあり、現在でもサマルカンドに大量の水を供給している。

1854年、ブハラの王ムザッファル・ハーンがこのモスクの修復を始めた。アイワーン部と天井付のテラス部が1899年に増築された。1916年にはサマルカンドの棟梁アブドカディル・ボキエフはダルヴォズハーナ（正門部）に手を加えた。1997年より修復は現在も続いている。

2. ハズラティ・ヒズル・モスクにおけるインタビューから

2005年8月30日、このモスクのイマームであるアーラム・ハーン・ナビラエフ師（Alam Khan Nabiraev）に、話を伺うことができた、ウズベク語で通訳をつとめてくれた坂井氏の協力で、聞き取り調査をすることができた。以下はその内容である。

ナビラエフ「クタイバがサマルカンドに来た時、ヒズルも一緒にきた。この地において標高が最高である地点にモスクを建てた。クタイバがもう1度この地を訪れた時、モスクは完成した。時は8世紀、彼は由緒正しき場所にモスクを建てたのだ。その証拠に、40メートルもの地下から水を湛えた古井戸が最近発見された。この水は飲むことができる。つまり、この場所には井戸が先にあったのだ。ここはモスクであると同時にズィアラートガー、つまり巡礼地・聖地でもある。聖典の18章と114章にはヒズルに関する記述があり、彼の名はバリヨ（Baliyo）というのだ。ヒズルは、緑が多い場所や、川や水路など水の多い場所にいる。ヒズルはピールpir（聖者）として考えられている。ご利益は旅人を悪霊から守ってくださる」



図9 ナビラエフ師との対話



図10 クルアーン（奥）と聖水



図11 テラス部のミヒラーブ



図12 灯明とお賽銭



図13 同形の灯明台(ブハラ)

モスクの礼拝堂前室の北壁にタフト（小寝台座）を置き、イマーム・ナビラエフと坂井氏がそこに腰掛けながらインタビューは進んだ（図9）。『クルアーン』台の前には水を満たした椀が三つある（図10）。その水は発見された古井戸の水であり、飲むことができるというのだ。もちろん有難く飲ませていただいた。これは今まで幾つかヒズル廟を見てきた中では特異であるといわねばならない。最近見つかった古井戸の聖水に、「アービ・ハヤート ab-i-hayat（不死の水）」のようなヒズルのシンボルをあわせて、新たなバラカ baraka（御利益の呪力）を創出しているといえるからである。金属製の椀にも内部に『クルアーン』の文句であるアラビア文字の刻みが見える。これ自体、聖句を浸した聖水を飲むという祝福を明示している。つまり、聖水にヒズルと『クルアーン』の聖句が幾重にも象徴的な聖性を与える装置となって、この礼拝施設（モスク・霊廟）の新しい御利益を売り出そうとしている。今後この場所のあり方がどうなっていくか、注視してゆきたい。

さて、このモスク内にはモスクらしからぬ民俗信仰の礼拝・祈願施設が、古井戸以外にもみられる。1つはパーイ・カダム pa-i-qadam と呼ばれる足跡の聖跡で、独立した小部屋をもって祀られている。この足跡はアリーや神秘主義聖者のものが一般的であるが、残念ながら聞き取り損ねてしまった。次回の課題でもある。

さらに、外に張り出したテラス部にもミヒラーブの小さい窪みが見られメッカの方向を示している（図11）。大きなモスクには複数のミヒラーブが見られるものも少なくないが、ここでは、そのミヒラーブと対峙する位置の小室内に石の灯明台があり、参拝者によって蠟燭が燈されているのである（図12、13）。神アッラーに祈るべきモスクで蠟燭を何故燈すのだろう？ ナビラエフ師に尋ねると、「参拝者が好きでやってい

る」と要領を得ない回答がかえってくる。筆者の所見では、外に面したテラスの張り出し部空間は、ヒズルの領分であると考ええる。不必要ともいえる小さなミヒラブに、灯明台のセット。この空間は姿が見えぬとされるヒズルが神に祈るモスクであると同時に、願掛けにきた参拝者が灯明でヒズルに祈る場所ではないか、と考える。この仮説も今後訪問を重ねて証明してゆかねばならない。

——おわりに

初めてのウズベキスタンは想像以上に、強くイスラームが生きている土地だという印象を受けた。調査の第一目的は、調査者たち固有の専門性にひきつけて中央アジアをどう語りえるか、その対象素材の入手を限られた日数で最大限に試みることであった。この点では大きな収穫があったと断言することができる。

筆者は今後の定点観察の場となるハズラティ・ヒズル・モスクと出会うことができた。南アジアでは、ヒズルを祀る聖祠はモスクの機能も有しているが、不可視なる聖者ヒズル自らが神に対して祈る場所であり、参拝者はもっぱらそこに住まうとされるヒズルに対して願掛けにきていた。ところがここでは、民間信仰や聖者崇拜の領分に属するはずのヒズルは水と結びつき、神にのみ祈りを捧げる場所であるモスク自体とも深く結びついている。いわゆる正統イスラーム側の領分にヒズルがいたことが、筆者にとって大きな驚きかつ発見でもあった。この新しいヒントは、「モスク」か「聖祠」かを意識し直しながら、南アジアにおける調査に目を向けることが可能となった喜ばしい収穫である。

実はもう1つ、どうやって手をつけてよいか進みあぐねているテーマにも出会ってしまった。それはブハラのナクシュバンディー教団である。日常社会生活を普通におくるスーフィー教団の活動実態を、ブハラとラホール（パキスタン）、デリー（インド）を結ぶ範囲で文献収集と聞き取りからなる資料収集をしてみたい。そしてスーフィー史上、一番最後に南アジアに入ってきたこの教団のプラクティス「沈黙のズィクル（唱名）」が各所でどのように行なわれているかを確かめながら、再びブハラを目指して辿り直したいのである。また近いうちに、より具体的な調査でウズベキスタンを訪ねる機会が巡りくることを祈願する次第である。

《参考文献》

Subhan, John A. 1938 *SUFISM-Its Saints and Shrines*, Cosmo Publications, rep., (1999) New Delhi.

[むらやま かずゆき]